

ドイツ・ハレでの一年

人文学部教授 森 澤 万里子

平成25年4月より一年間、長期海外研修員としてドイツのハレ大学で研究を行う機会をいただいた。ハレ・アン・デア・ザールは人口約23万の中規模都市で、旧東独圏に位置する。この地を研修地としたのは、ドイツ語学文学研究所のハンス-ヨアヒム・ゾルムス教授のもとで、初期新高ドイツ語（1350年から1650年頃のドイツ語）コーパス等を使用しながら、研究課題「16世紀におけるニュルンベルクの都市言語研究」に取り組むためであった。研究資料を収集するため、また、ゾルムス教授にご助言をいただくため、それまでも度々ハレを訪れていたが、長期滞在によって、2、3週間の出張では得られないさまざまな体験をすることとなった。

最初に目にした大きな出来事は一般市民による大規模デモで、それは4月末のことだった。この発端は州政府が発表した予算削減案の中に大学病院の閉鎖が含まれていたことである。

ドイツは16州から成る連邦国家であり、この内、ハレが属すザクセン・アンハルト州を含む5州が1990年のドイツ再統一時に新たに加わった、いわゆる新連邦州である。各州政府は自治を行っており、大学制度の運営も基本的に州の所管事項である。ちなみに、ドイツ連邦教育研究省のホームページ¹⁾によると、昨年5月2日現在の大学数は415、その内総合大学は106、専門〈単科〉大学が207、残りは教育大学等である。これらの大学の約8割が州立大学であり、大学教育費も基本的に州予算から支出される。

東西ドイツの経済格差はドイツ再統一以降徐々に解消されつつあると言われるが、ザクセン・アンハルト州の経済はいまだなお苦境を脱したとは言えない状況にある。それは1990年から2009年の間にこの州の人口が18%も減少したことから看取される。この数値は都市州を除いた13州の中でザクセン・アンハルト州の人口減が最も大きかったことを示すも

のである²⁾。ハレ大学の現在の学生数は約18,000であるが、学業の修了と共にその多くはより良い雇用の機会を求めて他州に流出してしまう。それだけ一層、魅力的な職場を増やし、優秀な人材をつなぎとめることがハレ市、そしてザクセン・アンハルト州の抱える課題の一つとなっている。

このような状況にあるにもかかわらず、州政府はハレと州都マクデブルクにある大学病院のうち一方を閉鎖する案を打ち出した。そうでもしなければ近い将来に州の財政が破綻するというのである。しかし、大学病院を閉鎖すれば医学生の研修の場が失われる。そのみならず、地域医療の拠点も姿を消すこととなる。そこから、医学生や大学病院の職員、そして医学を志す中学生から大学病院の医療に頼る高齢者までもがデモに参加し、それは7,000人を超す数に膨れ上がった。ザクセン・アンハルト州の歴史の中で最も大規模なデモの一つとなったのである。

デモそれ自体は平和的なもので、人々はゆるゆると、しかし時にシュプレヒコールを上げながら、町の中心部、マルクトプラッツへと行進して行く。マルクトは「市」、プラッツは「広場」、両者を合わせると「市の立つ広場」の意となるが、日常的な市のみならず、クリスマス市、コンサート等のさまざまなイベントがここで開催される。人々が参集する重要な場となっているのである。

マルクトプラッツでは大学病院閉鎖に反対する演説が次々と行われていた。演説者の中にはハレ大学学長もおり、「未来を創るのは教育である」と述べた時には参集者の間から大きな拍手が起こった。そ

1) Bundesministerium für Bildung und Forschung: Hochschule (<http://www.bmbf.de/de/655.php> : 最終アクセス2014年7月29日)。

2) 服部圭郎: ザクセン・アンハルト州の縮小政策に関する研究 (明治学院大学産業経済研究所 研究所年報 第27号 2010年12月 61-87頁)、63頁参照。

の様子から一丸となって州政府に立ち向かおうとする人々の姿勢が伺えた。このような形で明確にされた市民の意思を州政府も無視することはできず、その後、大学病院の閉鎖案は保留となった。

この一件とは全く異なる事態が生じ、人々が再びマルクトプラッツに参集することになったのは6月のことである。

出発直前、3月下旬にインターネットで天候を確認した際、ドイツは寒波に見舞われているということを知った。4月1日にベルリンに降り立つとやはりあたり一面雪景色だった。ドイツは日本よりも北に位置し、南部の都市ミュンヘンは札幌よりも緯度が高い。国の地形が異なるため日本と比較しにくい、ハレが位置するドイツ中部の天候は北海道のそれと大差ないと言ってよいだろう。しかしながら、5月に入り、温かくなるどころか、真冬並みに冷え込む日が続くようになると、さすがに異常気象を意識せざるをえなくなった。6月初旬の雨の日に、他市に住む知人を訪ねる際、ダウンコートを着込んで出かけることにしたが、それは正しい選択だった。知人と町中を歩く間、寒さのあまりコートのポケットから手を出すことができないほどだった。

知人宅からの帰途、列車の窓から外を見ると、畑地と思われる一帯や民家の一部が既に浸水していた。帰宅後ラジオで地域放送を聞くと、各地で洪水の被害が出始めているという。その後何日も雨は降り続き、ハレを流れるザレ川の下流域に関しても大きな被害が次々と報告されるようになった。残念だったのは、ハレから列車で一時間ほど行ったところにあるヴィッテンベルクで、6月7日から三日間にわたって予定されていた「ルターの結婚式」というイベントが中止となったことである。ヴィッテンベルクは16世紀にマルティン・ルターが宗教改革の発端となった『95ヶ条の論題』を公表した地として有名で、カタリーナ・フォン・ボーラとの結婚をモチーフとするイベントは毎年多くの観光客を集めていた。

そうこうするうちにハレも無事ではいられなくなった。ハレ大学の校舎は町の至る所に散在しているが、川辺にあった校舎の一部も浸水し、有志の学生が水をくみ出す作業に追われた。大きな被害が出た町の西部では、雨が強い間は消防等が防災にあっていたが、天候が回復するとボランティアの市

民がマルクトプラッツに集まり始め、そこから人手が必要とされる場所に送られていった。主な作業は袋に砂を詰めて即席の土手を築くことである。大学も一時休講となり、ホームページには学長名でボランティアを奨励する文章が掲げられた。被害を食い止め、少しでも被災者の力になろうとする市民の姿はドイツ全土でテレビ放送され、大きな共感を呼んだ。こうして「世紀の洪水年」と言われた2002年を上回る規模の災害を人々は乗り越えていった。

印象に強く残ったのは、洪水がほぼ収まった頃にマルクトプラッツで「ダンケ（ありがとう）・コンサート」なる催しが行われたことである。ハレ市、地元新聞局、ラジオ局等の共催で、復興支援のためのチャリティーコンサートという一面も持っていたが、その形式は被災者が壇上で当時の様子を語りながら、苦境にあった自分達に手を差し伸べてくれた人々に謝意を示すというものだった。そこに集まった多くの人々は話をしみじみと聞きながら、その合間に流れる歌の歌詞に心を動かされながら、もちろんビールを共に飲む喜びを味わいながら、再び心を一つにしているように見えた。

ヨーロッパ人、そしてドイツ人についてもよく言われるように、彼等の大半は個人主義者であると見なしてよいだろう。ただし、それは他者に無関心ということでは全くない。むしろ、必要があれば積極的に手を携えようとする気持ちが非常に強いように見受けられる。今回の海外研修では研究のかたわら、最近ドイツでよく話題となる彼等の「団結心」(Solidarität)を間近で目にする機会を得たが、異文化に生きる人々の中に息づくこのような人間性についても授業の中で学生達に伝えていきたいと強く思った次第である。



行く一手のブラジル

経済学部教授 米田 清

勝負事では「ここは負けても行く一手」という場面があります。過去に打った一連の手を生かすため意地で方針を貫くという意味で、埋没費用概念の逆を行く美意識です。

今回の在外研究は終盤のそういう局面でした。

1 リオで構想

私は小学校3年を終えたときリオ・デ・ジャネイロに引越しました。移民船が活躍し、国際線がプロペラ機の時代です。ブラジルの首都はまだリオで、ブラジルに移転する直前でした。日本人学校はありません。ですから移住でなく駐在で来ている日本人の子供はアメリカン・スクールに行くのが普通でした。私はそうせずポルトガル語で授業をする学校に行きました。リオの生活は当時の日本より格段に豊かで自由でした。

中学1年で日本に戻ってからはポルトガル語を忘れないように手紙を書いたり、なるべく英語やフランス語に触れるようにしました。学生時代のアルバイトも外国につながるよう、技術翻訳をしたり、北米での商談やブラジル視察に通訳として随行したりしました。

理系の修士を修了して電機会社の研究所に就職しました。しかし日本の生活が窮屈で、20代のおわりに、ブラジルに移民として渡りました。海外移住事業団から片道の航空券、ブラジル政府から永住権が出ました。

2 サン・ジョゼに仕掛

渡航後は国立宇宙科学研究所 (INPE) にいました。サン・ジョゼ・ドス・カンポスという航空機産業の中心地にあります。同じ町にある EMBRAER という会社は日本にもコンピューター機を輸出しています。渡航前にアメリカ航空宇宙学会に人工衛星の熱解析に関する論文が通っていたので、それをポルトガル語にして2つめの修士をもらいました。日本の学歴もサン・パウロ大学で認証してもらい、技師の資格を登録してブラジルで暮らす基盤ができました。

当時ブラジルの政権はアメリカがこしらえた軍事独裁です。当のアメリカがそれを見放す末期に当たり、社会は閉塞感が強く経済は停滞しています。それでも「人と同じにしろ」という圧力がないだけ日本より気楽です。その一方、社交が重要でめんどうです。総合的に考えて一旦ブラジルを撤退し、日本



1961年 リオの空港から帰国



1981年 ブラジル北東部の荒野

の研究所に復帰しました。

その後ブラジルは年間4桁（まちがいではありません）に達するハイパーインフレ時代に突入しました。

3 フロリパは手詰り

日本国籍のままブラジルを出て2年たつと、永住権を失います。ですから永住権を維持するには、2年以下の間隔でブラジルに行かねばなりません。ブラジル国籍を取得すればその心配はなくなる代り、日本国籍は放棄するのが建前です。ブラジルでは選挙で投票が権利だけでなく義務になっているとか査証の相互免除国が少ないとか、国籍を取るとめんどろなこともあります。

そこで国籍は日本のままで、永住権を維持するため定期的にブラジルに行くという選択をしました。これは一見たいへんな手間ながら、実は職場で長期休暇を取る口実になりました。ブラジルは地球の裏なので経路を自由に選べ、世界の各地に行ってみる機会にもなりました。フロリアノポリス（口語でフロリパ）というサンタ・カタリナの州都に家を買ひ、本拠にしました。日本で稼いだお金はその頃のブラジルでは使いでがありました。

日本が嫌になったらいつでもブラジルに行ける。会社勤めを続けられたのは、この余裕があったからです。私は父の原爆体験、母の東京空襲談、朝鮮やベトナムの戦争、学生時代に行ったソビエト連邦や中東での体験などから、日本が戦争に巻き込まれる可能性を心配していました。いざとなったら逃げられる体制は保険でもありました。



2006年 かつての INPE 同窓生
これと次の写真の右端が Walter Celaschi

しかし移住を再決行する機会がなかなかつかめうちに、ずるずると年月が経ちました。私の染色体に異常がみつかり、多忙な勤務を長くは続けられない気配が濃厚になりました。そこで、それまでの仕事の締め括りとして早稲田から工学の博士をもらいました。

区切りがついて再移住の好機に見えた時、福岡大学の経済学部で教員を公募しているのが目に入り、応募して採用になりました。また中止です。以後ベルギーでの在外研究を挟んで、たちまち更に時が流れました。その間、遺伝病がじわじわ発症して歩くのがやっとの状態になり、海外旅行は単独では難しくなりました。それでも友人に同行してもらうなどして、ブラジル通いは継続しました。

4 カンピナスが打開

これでブラジルに行くのも最後かもしれないと、同窓生 Walter Celaschi (W) の家に寄りました。サン・ジョゼ時代、私は W と女性の計3人で家を借りて共同生活をしていたのです。W はソフトウェア会社および建設会社の両社長と大学教授を兼ねています。W の大学に同行した際、学科長と話したところ、在外研究に来るなら受け入れるとのことでした。現状では教育主体の大学なので、研究を立ち上げたいから手伝わないか、という話です。

私はブラジルから得たものが多いので、何か貢献したいと思っていました。しかし病状や家族の状況を考えると、在外研究は無理です。とは言え、この機会を逃せば後はありません。ここは負けても行く一手。あまたの障害を強引にねじ伏せ、2013年の3月から1年間、在外研究で滞在しました。



2013年 カンピナス三菱東山農場
とうざん

ブラジルで最先端の研究大学はサン・パウロ州立カンピナス大学 UNICAMP (UC) です。私がいたカンピナス総合大学 FACAMP (FC) はその UC の先生たちが創立した私立大学で、UC の敷地内にあります。ハイパーインフレの時代、收拾を目指したクルザードという政策がありました。FC の学長はその立案に関わった経済学者です。

FC の理念は明快で、それは UC の補完です。UC は公立なので授業は無償で、理論に重点を置き研究者の育成に力を入れています。FC は逆に UC にはない実学を整備しています。授業料は高く、質の高い教員を高給でそろえ、裕福な家庭の子弟にエリート教育を提供する戦略です。だから学生たちは言動も服装も、見るからに良いとこのお坊ちゃんお嬢ちゃんです。私は生産工学科にいました。FC の教育はこの分野でも最高の評価で、企業から求人が殺到します。

私が FC で立ち上げた研究は効用関数の仕様定義とその最大化に関するもので、力点は実用にあります。W と共同で、スペインで行われた国際学会で発表を行い、ヨーロッパの学術誌に査読のある論文を共著で載せました。加えて別の論文も UC の Moretti 教授と共著で同じ雑誌にアクセプトされています。他に UC, FC や国立情報技術研究所などで講演をしました。

ブラジルでは旧友とか福岡大学に留学していた教え子が軒並み偉くなっています。その人たちが寄ってたかって世話をやいてくれるので、居心地は最高でした。共同研究は人数を増やして継続中です。

5 局後の感想

序盤は順調ながら中盤で膠着し、ジリ貧に見えた終盤、何とかとどめを刺した気分です。

私の本職は数理モデルの作成です。設計は言語としての数学、実装は計算機言語でやります。これは一般意味論のような、自然言語に対する関心の延長線上にあります。その大もととはリオの体験で、ポルトガル語が応用数学につながっています。

もし私が30代で日本に戻らなかったら、どんな人生を送ることになっていたか。友人たちを見回して想像するに、ブラジルにいたほうがぜいたくはできたようです。ブラジルは格差社会で、上層は日本よ

りずっと豊かな生活ができるからです。何があっても楽しむのがブラジル精神で、日常は愉快だったでしょう。人間関係も日本にいるより摩擦が少なかったはずです。

反面、仕事はぎくしゃくして嫌になったと思います。無計画で約束はあてにならず事務は煩雑でインフラが弱いからです。技術者や研究者としては生きて行けずに、すぐに経営者や管理者になってしまったことでしょう。事故、犯罪、風土病の対策にも神経が消耗したはずです。

結局は、あれも一局これも一局。自分で選んだ展開なので納得できます。

